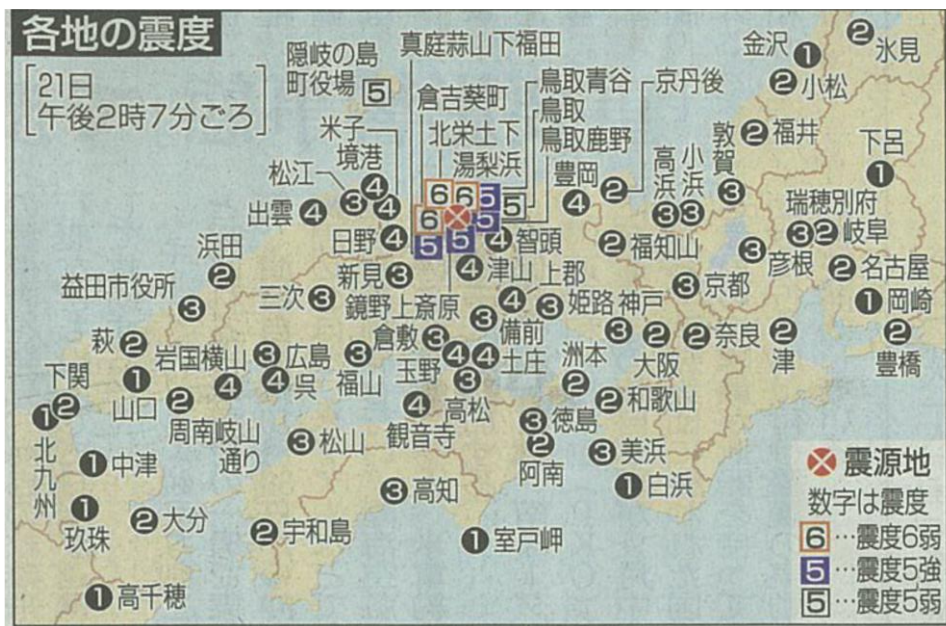


鳥取県中部地震の概要

鳥取県中部地震は平成28年10月21日、金曜日14:07に鳥取県の中部を震源として発生した地震である。地震の規模はM6.6で震源の深さは11km、最大震度6弱を倉吉市、湯梨浜町、北栄町で観測した。

■ 日本海新聞掲載記事 平成28年10月22日(土) 1面



(C) 新日本海新聞社 無断複製・転載を禁じます。



厚生病院周辺の被災状況(防災ヘリから撮影)

鳥取中部 震度6弱

県内で6人けが 2700人避難、余震続く



震度6弱の地震が激しい、エントランス付近の天井が落ちた倉吉未来中心。21日午後2時40分、鳥取県倉吉市駄経寺町

21日午後2時7分、鳥取県で震度6弱の地震があった。倉吉市、湯梨浜町、北栄町で震度6弱、鳥取市鹿野町、三朝町などで震度5強を観測したほか、関東から九州にかけて広い範囲で揺れを観測した。気象庁によると、震源地は鳥取県中部で、震源の深さは約11キロ。地震の規模はマグニチュード(M)6・6と推定される。津波の心配はない。その後、同県などで震度4を観測するなど、余震とみられる地震が続いた。

鳥取県内では、境港一建物の被害も相次ぎ、国広統的建造物群の小学校で避難中の、国広統的建造物群児童が転倒し手を骨、保存地区の倉吉市の白折する重傷、5人が軽傷、壁土崩壊の一部が傷を負った。21日午後、破損したほか、倉吉未来中心の約2700人が避難し、部が崩落、体育文化会館でも天井板(90センチ、愛媛県伊方町の伊方)が30枚余り落下した。湯梨浜町では3階建て庁舎のタイル壁が崩壊した。県内の約3万9800戸が停電した。福井県内にある原発も異常は確認されていない。



交通機関にも広く影響は及び、山陽幹線は新大阪、博多間の全線で運転を一時見合わせた。東海線も一時運転を取りやめた。各電力会社による災害派遣を要請、同市と湯梨浜町、北栄町に

災害救助法の適用を決めた。政府は、首相官邸内の危機管理センターに官邸対策室を設け、警察は災害警備本部を設けて、被害情報の収集に当たっている。

日本海新聞掲載記事 平成28年10月23日(日) 1面

234棟損壊 重軽傷16人

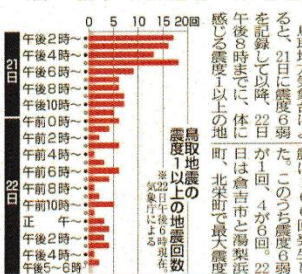


雨に濡れ、地震で壊れた屋根にブルーシートを張る人たち。22日午前、鳥取県倉吉市共同通信社ヘリから

鳥取中部地震

余震160回超 なお1324人避難

鳥取県中部で最大震度6弱を観測した地震は、22日も余震とみられる揺れが断続的に続いた。県災害対策本部によると、県災害対策本部によると、22日午後4時までに234棟の家屋が損壊し、16人が重軽傷を負った。1市4町で1324人が同日から自治体によるボランティアの受け入れが始まり、復旧に向けた動きも本格化した。



鳥取県中部の地震による被害・避難状況 (22日午後4時現在)	
人的被害	16人 (重傷2、軽傷14)
住宅被害	234棟 (全壊3、半壊2、一部破損229)
公共土木施設被害	42カ所 (河川1、砂防3、道路30、橋りょう3、その他5)
住民避難	1,324人 (倉吉979、三朝199、北栄65、湯梨浜74、琴浦7)

た家屋234棟のうち、北栄町で3棟が全壊、2棟が半壊、倉吉、三朝、湯梨浜の3市町を中心に239棟が一部損壊した。地震から一夜明け、自治体が雨を防ぐブルーシートを配布した。住民は屋根の上で広げ、家屋の残付けに追われた。県内のライオンはほぼ復旧したが、県中部では広範囲にわた

り水道の濁りが続いており、自衛隊の給水車が出ることで対応している。県は、1市4町が連営する避難所に物資の搬入を停止するなどの支援を本格的に始めた。熊本地震で課題となった「車中泊避難」も、各自治体が避難状況や健康状態の把握に努めている。倉吉、湯梨浜、北栄の3市町では、支援の受け皿となる「ボランティアセンター」も設置された。一方、県中部のホテル・旅館で宿泊予約のキャンセルが相次ぎ、観光面に影を落とす

【本紙記者取材】

I. 各部署の状況と対応

① 外来

発災直後、外来では内科、神経内科、小児科、産婦人科が業務を行っていた。電子カルテが使用不能となり、外来患者の診察は一旦中断された。

その間、看護師はトイレ内の患者の有無なども含め、状況を確認後、患者を正面玄関前へ避難させた。職員は自発的に玄関周囲の長いすを患者待機場所に搬送し、その後、患者の保温のため、毛布を外来周辺から運んだ。

診察を待っていた患者の中に処方箋作成が必要であった患者はなかった。院外処方を発行していた患者の中には、院内処方での対応に変更した患者がいた。外来の患者は玄関前に待機後、帰宅した。

② 会計

発生時会計待ちの患者には、後日の支払いを指示し帰宅させた。診察を中断された患者に対しても同様の対応とした。



外来は診察を中断



北玄関「閉鎖中」の表示

③ 中央放射線室

中央放射線室のMRI室は工事中であった。揺れによりMRI室外に粉塵が流出した。MRI車両が建物外に駐車しており、建物との連絡通路が破損し、一時MRIの使用が不可能となった。

中央放射線室では、3名の患者が治療中であった。血管造影室では下肢動脈血管拡張術施行中の患者がいた。モニター類の電源が遮断されたため、室外の移動用モニターを持ち込み装着した。赤色灯のみの明るさであったため、懐中電灯で照らしながら、シースの抜去と止血操作を行った。患者を1階中央処置室にストレッチャーで搬送し、待機した後に、担架で3階病棟へ搬送した。透視室③には内視鏡的大腸ポリープ切除術がほぼ終了した患者がいた。停電のため内視鏡画像モニター、X線透視は使用できなかった。大腸ファイバーを慎重に抜去した。患者を正面玄関前に避難させた。透視室⑦には気管支鏡検査施行直前の患者がいた。施行を中止し、近くの避難路から屋外へ出て待機した。その後、正面玄関へ移動した。



MRI車両と連絡通路

④ 検査室

検査室では、脳波測定中の患者1名がいたがパニックはなかった。

⑤ 理学療法室

理学療法室では5名の患者がリハビリ中であった。理学療法士が患者を北玄関から建物外へ避難させ、その後、正面玄関へ患者を誘導し待機させた。

⑥ 手術室

手術室では全身麻酔下に手術中の患者がいた（上皮小体摘出術）。摘出操作は中止し、閉創、麻酔から覚醒させた。気管チューブ抜去後、同じ階（3F）のICUへ移動した。

手術室内での照明、医療用ガス、吸引については問題は生じなかった。断水状態が続いていたが、緊急手術を施行できる機能は維持されていた。

⑦ 分娩室

分娩室で分娩監視中の患者が1名いた。家族が周囲におり、揺れの後は、家族が患者を取り囲むように保護した。

発災から約30分間は病棟地下から4階までの赤電源が使用不能となったため、分娩エリア入口の電気キーが作動しなかった。ドアを開放のままとして対応した。余震が続く中、院外からの紹介1名を含め翌日まで5名の出産管理を問題なく行った。

⑧ 透析室

発災時に透析中の患者はなかった。断水、水の濁りにより血液透析の施行はできないと判断した。

⑨ 病棟

発災当日の入院患者は、220名（稼働率 73.3%）であった。病棟では、患者の転倒1名、点滴台の転倒、本棚からの物品落下などが発生したが、患者と職員に受傷者はなかった。避難に備え、患者を談話室に集合させた病棟もあった。

強い余震に備えて、静脈ラインをヘパリン生食でフラッシュしてロックする指示がでた患者がいた。

2Fにはベビーが10人以上おり、新生児避難具（レスキューママ）を使用し避難に備えた。

⑩ エレベーター

エレベーター内での被災が2件あった。使用中のエレベーターは業務用の2基であった。ヘリポート、感染病棟、霊安室へ通じる右側のエレベーターは、4Fから1Fへ下降していた。4Fの入院患者（78歳男性、骨格筋融解症、腎不全）の状態が悪化し、精査のためCT室に行く途中であった。患者はベッドに仰臥位でおり、酸素マスクを装着

し、カテコラミンの持続点滴中で、主治医と看護師2名の計3名が付き添っていた。2Fと3Fの間で揺れが起こり、エレベーターは一旦停止、2Fへ自動的に下降しドアが開き患者は2F病棟へ収容された。患者はその後、担架で4Fへ戻り、全身状態に問題は生じなかった。

向かって左側のエレベーターは、1Fから6Fに上昇していた。6F入院中の患者(84歳男性、うっ血性心不全)は売店で買い物をして病棟に戻る途中であった。車椅子に座り、酸素や静脈ラインはなく、看護師1名が付き添っていた。2Fと3Fの間で揺れが起こり、エレベーターが止まり動かなくなった。看護師が非常用ボタンを押して、4F事務室職員とすぐに連絡をとることが出来た。エレベーター管理会社職員が来院し、発災から1時間8分後(15:15)に、エレベーターは2Fへ下降し患者は2F病棟へ収容された。患者はその後、担架で6Fへ戻り、全身状態に問題はなかった。

11 厨房

厨房内は、強い揺れの後に照明が消え、バッテリー作動の非常灯が点灯した。加熱調理器を使用していない時間帯であったため、火傷などの外傷者はなく、火災の発生も無かった。照明が殆どない状態であり、職員は1F駐車場付近に避難した。数人で地下の安全を確認した後に、夕食は非常食で提供することを決定し、地下で業務を行った。

12 ボイラー室

ボイラー室では2名業務中であった。停電後も非常灯下でモニター類を見ながら業務を続行した。

13 保育室

保育室には15名の小児と6名の保育士がいて昼寝中であった。部屋の中央に集まり待機した。その後、本院職員の指示に従って建物外へ一旦避難した(深田公園)。その後、理学療法室へ移動し親の到着を待つ待機した。

14 図書室

図書室には患者1名がいたが、比較的落ち着いておられた。職員が病棟に送り届け、看護師が付き添って病室に帰室した。

15 清掃業者

正面玄関先に避難した。院内に戻って、通常の廃棄物収集を行い帰宅した。翌日からは、通常の業務を継続できた。